



みみん

【題字】谷川俊太郎さん



せんだい・みやぎNPOセンターニュースレター“みんみん”は、あらゆる組織が社会課題解決をキーワードに出会うきっかけづくりと、活動を発信をすることから、新しい風を起こしていきたいと願っています。

目次

P 2	4
P 5	...
P 6	...
P 7	...
P 8	...

第15回通常総会、記念シンポジウム報告

『クロスセクター』

丸森筆甫地区 復興支援員

人材育成事業 NPOステップアップ「5+1講座」ご紹介

『ライブラリレー』

特定非営利活動法人防災士会みやぎ

新規会員・継続会員、編集後記お知らせ、連絡先等



MY FAVORITE お気に入り小物拝見

風見先生のお気に入りの小物

岩手県遠野市で、馬搬（ホースロギング）を守り続ける岩間敬（遠野馬搬振興会）さんからの贈り物です。馬によって運び出された木によって作られた、クラフトアートです。

自然を身近に感じる癒しの一品です。

第15回通常総会記念シンポジウム

これからの宮城を創る地域公共人材とは

日時:

2013年9月15日(日) 15:45~17:20

会場:

仙台市市民活動サポートセンター6階(セミナーホール)

総会終了後、第15回目の総会記念シンポジウムとして、「これからの宮城を創る地域公共人材とは」というテーマについて、当センターで実施しているフラスコイノベーションスクールの総合プロデューサーである風見正三氏をモデレーターに、当センターにゆかりのある3名のパネリストとともに、論議いたしました。その全てをここで紹介することは不可能ですが、抜粋して、当日の様子をお伝えしたいと思います。

■テーマ1

地域公共人材とはどういった人が 求められるのか？宮城の現状に照らして

風見:「地域公共人材」、この言葉の意味するところは大変広いです。まず、最初に申し上げたいのはクロスセクターを誰が担っていくのか、ということです。市民が発起することは当然ですが、NPO・中間支援組織が中心となりえるか、ということがこれまでも常に話題の中心にありました。

石山:多賀城市市民活動サポートセンターは、平成20年に、仙台市市民活動サポートセンターをモデルに開設しました。多賀城は、仙台のベッドタウンという点でいえば都会的なイメージをもたれるかもしれませんが、一方で、地域に根強く残る地縁団体の活動が盛んな地域でもあります。



モデレーター:風見 正三氏(宮城大学)

パネリスト:

石山 和彦氏(多賀城市役所)

西出 優子氏(東北大学)

宗片 恵美子氏(NPO法人イコールネット仙台)



そういったこともあり、多賀城市市民活動サポートセンターでは、テーマ型のNPOだけでなく、社会教育に取り組む生涯学習団体や地域自治を行って いる町内会なども含め、広い意味で市民活動を担う方々を対象として支援してきました。その過程において、いかに仕掛ける人をつくっていくかだけでなく、「つながる人」をどう支援していくか、ということについても重視するようになりました。また、地域コミュニティを特徴づける「自然と誰かの役に立っている人」にも注目しています。ここで考える地域公共人材とは、①「仕掛ける人、起こす人、つなげる人」、②「つながる人、カギになる人」、そして、③「自然と誰かの役に立っている人」の大きく3種類の人材に分けられるのではないのでしょうか。

風見:ありがとうございます。仕掛ける人は当然必要ですが、つながる人材、つながるべき人材をどのように発掘するかが大事で、それを誰がやっているのかも大事。それを踏まえてつながっていけば立体的に地域になっていく、といったイメージが湧きました。宗片:男女共同参画の視点から、特に地域防災における女性の役割の重要性の観点で、地域公共人材の育成に取り組んでいます。今回の震災では、地域の女性たちも地域防災の担い手となり、主体的に動いていかなければならないことを実感しました。というのも、地震が発生した3月11日2時46分は男性が地域にいない時間でした。そのことが、我々が女性の防災リーダー養成講座を企画したきっかけであり、定員を大幅に超える応募があったことにつながっているのだと感じます。

避難所においても、炊き出しは女性で、リーダーは男性という関係はやめましょうと、私たちは声をかけてきましたが、なかなかそれは叶いませんでした。しかし、これから自分たちが抱えた困難を繰り返さないためにもやはり女性がリーダーとしての役割を担わなければいけません。もちろん男性と一緒にです。女性がそういう自覚をしたという意味では、今回の震災は教訓となりました。

西出: 東北大学西出ゼミでは、学生がNPOに関わったことで、どのような力が身についたかを学生自身が分析・ふりかえりをしています。その中から、先ほどの石山さんや宗片さんの話との共通点を探すと、主体性や働きかけ力というキーワードが浮上ってきます。

昨日より、東北大学では、日本NPO学会が主催する震災フォーラムが開催されましたが、そこでは、NPOの専門性の話として、課題を発見する力はあるとしてもそれを解決する部分で課題があるのではないかと話がでていました。それは次世代を担う若者にも共通することです。どのセクターに行っても地域に対する志を持ち、実行する人材が地域公共人材なのではないかと思います。また、多様な人への共感力を持つことも必要です。

風見: 学生がいかに関わるかについては継続性の問題もありますが、その中で主体性や共感力があれば縦にも横にもつながっていきますし、どのセクターにいても風穴をあけることができる人材なのかなと思います。地域公共人材というのはそれぞれの壁を越える人材なんじゃないかなと聞いていて思いました。

■テーマ2 どこから解決しなければいけないのか？

石山: NPOに対しては、その持っている専門性や活動、潜在的課題を公共化して欲しいと思っています。NPO活動が、まちの中で日常的に開かれていけばいいな、と感じる場面が多くあります。例えば、駅前で日常的に活動を発表したり、サークル活動とコラボレーションをして、専門知識を住民にさりげなく伝えたりと、事務所の中だけの活動ではなく、ぜひ市民に活動を公開して、NPO



の認知度や市民権を高めていければいいのではないのでしょうか。そのためにはまちが公共空間であることが大前提です。どうしても公共空間といった時には行政からするといろいろ規制をしているので、やっちゃいけないことがたくさんあるように思われますが、行政としては地域の方がまちを舞台に活動しやすいようなアクションを起こしていきたいと考えています。そして、サポートセンターの講座や地域の夏祭り等を通して、「やってみようかな」といったムードをまちの中に育てていきたいと思っています。

風見: 地域公共人材というのは「公共」の「共」の立場というのがさらに重要になってきており、いろいろなものが社会の共通財産になっていく、ということをおっしゃっていただきました。私も同感で、これまで社会的にどう共通財産をつないでいくのか、といった議論があまりなかった。市民協働や官民連携が議論されていますが、それは、協働してないから議論されるわけだし、連携してないから官民連携という言葉が使われる。それをつなぐ「公共」とは何か、その領域は何かといったことを議論することも重要だと思いました。

宗片: その論点でいえば、私達が、男女共同参画という表現を、ストレートに使用する事は避けていることが挙げられます。それは、その表現を使うと、抵抗を持たれてしまう場合が多いからです。たしかにそのことは、男女共同参画が実現していない現れなのかもしれません。なので、様々な視点から、男女共同参画にかかる公共人材の育成講座を企画しているのが実情です。

なお、これまで人材育成を行ってきた課題と対策ですが、まず、課題として、育成された人たちは、後は自分たちで力を発揮するように、ということになりかねないことが挙げられます。確実に人材が活用されるにはその道筋が必要となります。そういった意味では、私たちの講座を受講した後は、仙台市の講座を受講してもらうようにしました。そうすると仙台市の推薦を受けて各地域で活動することができます。NPOが育成した人材を地域が受け入れるということにはなかなかありませんが、仙台市が推薦をした人材であれば受け入れてもらえます。これは女性たちから出て



きたことで、自分たちの地域でしっかり根を下ろして活動していきたいという主体的な女性たちが増えてきています。受講生は今地域の中で活動しており、トップダウンのリーダーではなくある意味コーディネーターとしての役割を担っています。

風見:私は、政策決定に市民の意思がいかに反映されていないかを言い続けてきましたが、政策決定や事業の決定で、地域で地道に活動してきた女性が役割を認識していけば大きな流れになるとと思います。

西出:ソーシャルキャピタル(社会関係資本)は、やはり地域公共人材に必要なようになってくるでしょう。社会への信頼であったり、お互いの助け合い、つながりやネットワークといったものを地域全体で深めていくということが地域公共人材の育成と好循環・相関関係があるのではないのでしょうか。一言でつながる・つなげる、と言ってもいろいろな形があると思います。ソーシャルインクルージョン(社会的包摂)という観点も含めると、女性・若者・子ども・障がい者・外国人・多様な人の橋渡し、地域間の連携、クロスセクターが強調されますが、その土台となるのは一人一人が自分の居場所、安心して暮らせるための絆やアイデンティティです。また、地域のことを考えるには逆にグローバルな視点も必要です。東北にもたくさんの外国人、留学生がいますし、実際に被災地へとボランティア活動をしに来ていますので、非常に貢献意欲は高いのではないかなと思っています。そういった多様な人を巻き込んでいく力、共感力も必要になってくるのだと思います。地域を見るにはぜひグローバルな視点も持ってほしいですし、自分自身も実践していきたいです。

風見:ソーシャルキャピタルというのが何かというと、地域の包括的ないろいろなものを地域の人たちが主体的につくっていく姿勢となります。資本主義は民間の経済力ベースで広がっていきましたが、地域が適切に資本を蓄積していくためには企業だけでも行政だけでもできません。市民というセクターがやっとできて、その市民セクターを創業につなげたり、連携していったり、起業させたりしますが、その後ずっと支援しなければなりません。小さい志を持っている人に光が集まるような社会にしていけないとそういった人は報われません。男女共同参画にも言えますが、男女両方優秀な人がいるわけですから適材適所でなければいけません。

NPOというと儲けちゃいけないという誤解がありますが、そ

うではなく社会的な事業を行うことによって利益を得て、それを社会還元や人材雇用につなげ、経済的な発展を促していくことが重要な役割だと思っています。

主体的につなげる人をどうつなげていくかといった課題もあります。リーダーシップをどうするかといったことでは、トップダウンではなくボトムアップが重要ですし、志をベースにつないでいく仕組みも必要になってくると思います。最近、真の復興のためには、「支援」を「志縁」に変えていくことが重要であるといわれています。やはり志で何かしたいと思っている人をつなぐと新しい経済になると思います。

最後にみなさんと共に考えていきたいのは、地域の共通の財産として、自分が当事者意識をもって何を解決できるのかということです。また、良き市民に光が当たる社会、将来的に民主主義を広げていくのが重要なのだと思います。加藤哲夫さんも当事者意識という言葉をよく使っていましたが、問題意識に対して自分の立場で何ができるか、それはみなさん一人一人が持ち帰って頂きたいと思います。みんながそれを持って動き出したら世の中は変わりますし、いろいろな仕組みが充実されます。それをクロスセクターで実現していく時代を創っていければと思っています。

(記録 多賀城市市民活動サポートセンター 柳田洋一

編集 大町事務局 佐々木秀之)

総会報告

9月15日(日)、当センターの「第15回通常総会」が開催されました。司会の渡辺理事より定款23条に基づき議長の選出を行い、議長、大滝代表理事のもと、総会の成立を確認、その後、議事録署名人を白木福次郎さん、相馬潤子さんにお願いしました。

まず、第1号議案「2012年度事業報告および決算の承認」、次に第2号議案「2013年度事業計画及び予算の審議・決定」についてそれぞれ報告・説明が行われ、ともに承認されました。総会終了後、所轄庁、法務局、財務局、税務署などの届け出を9月中に完了しましたことを報告いたします。職員一同、皆様の期待にお応えできるよう、事業を行ってまいります。引き続きご支援ご協力お願い申し上げます。

(大町事務局 高尾詩乃)

クロスセクター

それぞれのリソースを活かし、
これからの地域を創造しよう。

これからの地域形成に不可欠な存在といわれる、
NPO、企業、行政、大学等の各セクター（部門）が考える地域づくりとは？
地域づくりプロジェクトのご紹介や、取り組みをしている方にお話を伺います。

今回は

丸森町筆甫地区 復興支援員

2013年7月から丸森町筆甫地区振興連絡協議会にて活動している復興支援員さんにお話を伺います。（当センター内の復興支援部門であるみやぎ連携復興センターでは、復興応援隊や復興支援員など、地域復興を現地で支える人材の活動推進に向けたサポートに取り組んでいます。）

インタビュー

丸森町筆甫地区振興連絡協議会 復興支援員 谷津由美香さん

復興支援員として地域と関わる

■きっかけと現在の活動

私は現在、角田市在住で出身が仙台市若林区です。出身地域が津波被害にあり、復興支援活動に何らかの形で携われれば、という漠然とした気持ちはありましたが具体的にはイメージしていませんでした。そんな時、筆甫地区で復興支援員の募集をしていることを知り思いきって飛び込んでみました。始めは、すでにあるコミュニティの中に入っていくことに、不安や緊張がありました。しかし、もともと筆甫地区ではU・Iターン受入を行っていたNPOが活動し

ており、外部からの移住者を多く受け入れていました。そのため「よそ者」を受け入れる土壌がすでにできていたことや、地域住民の窓口の広さに助けられ心よく受け入れてもらえたような気がします。また自分からも地区のイベントや会合に積極的に顔を出し、自己紹介も兼ねた月刊の活動報告「はじめのひつぽ」を、地区内の280戸に全戸配布することで、住民の方とも交流が深まり、現在では「こっちに来てまだ3か月だっけ?!」と言われることもあります。

■震災の影響による地域の変化

住民の方と話をしていると自分たちで地域を良くしようという気持ちが強く感じられますが、職員に聞くと震災前に比べ、住民の方の地域に対しての前向きな気持ちが弱ってしまっているそうです。皆さんと同じように、物質的なことは勿論ですが住民の心に消えることのない被害を受け、原発事故の影響への不安や、自分がここに住んでいいのだろうかという思いもお話の中で伺います。筆甫地区への誇りが弱まり、同時に行動力も徐々に落ちてしまっているようです。震災以前は、移住者を多く受け入れるなど、外部の

人を呼び込む様々な活動をしていました。しかし現在では、風評被害の影響で、飲食店なども閉店してしまい、地区内外の交流が少なくなっていました。宮城県内の方でも、丸森町は知っているが筆甫地区は知らないという方が多いと思うので、まずは筆甫の名前を沢山の方に知ってもらおう事と、皆さんに筆甫地区の現状を知ってもらい、足を運んでもらうきっかけを作っていきたいと思っています。

■今後の地域づくり

住民の方の気持ちや想いに寄り添って取り組み、住民の方が地域のために行う事後押しをしていきたいと考えています。

丸森町筆甫地区には「へそ大根」という名産品があり、震災前から全国にファンがいましたが、原発事故の風評被害の影響もあって、震災後は生産量も落ち売れ行きが落ち込んでしまっています。この「へそ大根」を、再び地域を知ってもらおうきっかけにしたらどうかと思い、種まき、収穫、へそ大根づくりの3回に分けた農業体験イベントを企画しました。このイベントには、地元のへそ大根の生産者さんやお母さん方から多大な協力を申し出てもらい、種まきには仙台市や角田市などからご参加いただきました。このように、地域内外から多くの方を巻き込んだ形でイベントが成り立っています。

また地元のお母さん方で作る「てしごと会」というサークルでは、紙バンドを原料にバッグや帽子などをつくっていますが、今のところ決まった販路があるわけではありません。相談を受けてもいるので、何か外とつながるきっかけづくりをしていきたいと思っています。

住民の方は、メディアから入ってくる「復興が進んでいる」という情報と、実際の地域の復興状況との違いに戸惑いを感じ、復興を進めたい気持ちと原発事故の影響への不安との間に、悩みを抱えている方が多くいらっしゃると思います。そのような住民の方の気持ちに寄り添いながら、今後も上記農業体験イベントや手芸品の販売等を通して、住民の方が動き出すきっかけ作りをしていきたいと思っています。

（取材・編集 みやぎ連携復興センター 中沢峻）

新年度「人材育成事業」のご紹介

宮城のNPOにおける 組織基盤強化支援事業

今年度の宮城県の委託事業としてNPOの組織基盤強化を目的とした「NPOのステップアップに今必要な5+1講座」を県内5地域で開催中。その内容をご紹介します。

石巻／岩沼／仙台／気仙沼の宮城県内5地域(大崎・栗原エリアは9月に終了)において「NPOのステップに今必要な5+1講座」と題し、NPOの組織基盤強化のための、集中講座を開催しています。

組織の課題をあぶり出し、その解決につながるスタッフ向けのスキルアップ講座と代表者、理事を対象とした社会を変える組織を創る講座を各地域で行います。

東日本大震災を経験し、震災前から活動している団体、震災後に地域の復興を目的に設立された団体、それぞれが継続した活動をしていくためには、組織の足腰、体力を強化していかなければなりません。組織の課題を把握し、弱点を補強することでより活動の成果につながります。

その先には基盤強化された団体が自立した組織として成長し、企業等他セクターと連携や協働し得る状況になっていくことが宮城の復興へも繋がってきます。NPOが他セクターから理解や信頼を得ていくためにも組織の基盤を強化していくことは今以上に重要になってくるのです。

今回の講座では、組織の課題整理・資金調達・情報発信・事務局運

営・マーケティング・社会を変える組織づくりといったテーマで、宮城ではなかなかお話が聞けない講師陣がそれぞれにパワーアップのポイントを伝えます。是非この機会に団体内複数で参加されることをお勧めします。

この講座と並行して、各地域に出向いて相談会も行います。組織の運営に関する事、事業に関する事など個別相談にも対応します。そちらも併せてご活用いただき、組織のパワーアップにつなげていただきたいと思います。

(大町事務局 遠藤孝志)

NPOのステップに今必要な5+1講座

■石巻会場

2014/1/16(木)

「社会を変える組織へ」理事・役員向けセミナー

■岩沼会場

2013/11/20(水)・21(木)

スタッフ向けセミナー 5テーマ

2014/1/17(金)

「社会を変える組織へ」理事・役員向けセミナー

■仙台会場

2013/12/12(木)・13(金)

スタッフ向けセミナー 5テーマ

■気仙沼会場 日程調整中

各会場のプログラム、お申込みはHPをご覧ください。

<http://www.minmin.org/?p=2224>

「出前相談」各地域の相談日一調整中 チラシ・HPでお知らせいたします。

Beny's Note

代表理事 紅邑晶子

オリンピックと被災地

2020年に東京でオリンピックが開催されることになり、一方で復興法人特別税は一年前倒しに、来年4月からは消費税が8%に引き上げられます。震災から2年半が過ぎて、被災地に寄せられた寄付金も8割以上がすでに配られ、新たに寄せられる寄付金も少なくなってきました。企業の関心も被災地支援のかたちが変わり始めているため、どのような支援をしたらよいのかといったヒアリングを受けることが多くなっています。手がかりがない被災地支援よりも、効果が見えやすいオリンピック事業へと企業の関心が移っていくことは大いにありそうです。このような状況から、被災地への関心が引き潮の傾向にあると感じています。

けれど、復興に関わる取り組みは長期戦です。被災地に足を運ぶと、高台移転やかさ上げのために朝夕トラックが頻繁に行き交い、建設機械が何十台も動いています。瓦礫の山は消えましたが、家の土台の上に雑草が生い茂ってそこに町があったこと、暮らしが営まれていたことは忘れ去られたままです。自治体の復興計画も人材不足や資材

の高騰などで思ったように進んでいない状況です。2年半を経て、仮設住宅の入居期間は、3年に延長されましたが、もとの町に戻らないという選択をする人たちが増え続けています。

先日スタートした「WORK FOR 東北(復興人材プラットフォーム構築事業)」は、企業の人材を自治体に派遣することが主な目的で動き出しました。同様に、被災地で活動している中間支援組織も緊急支援時の人材から長中期的な地域づくりの枠組みを作るプロジェクトマネージャ的な人材を求め始めています。また、住民たち自らが組織したまちづくり協議会でも自治体とつなぐコーディネーター的な人材を必要としています。自治体もNPOも今までになかった地域をデザインする仕事が始まっています。

あと7年後のオリンピックに向けて東京ではオリンピックスタジアムや選手村が建設されます。その頃の被災地は、どこまで復興しているのでしょうか。福島第一原発の事故処理は、どこまで進んでいるのでしょうか。オリンピック開催が被災地の復興のスピードを妨げるのではなく、むしろそれを支えることにつながればと思います。たとえば、オリンピック関連の事業を行う企業は、その利益の一部を復興支援基金に寄付するという仕組みを作り、国もそういった企業の寄付には税制の優遇を図るといった施策が実現すれば、どちらも喜ばしい未来につながるのではないかと思います。

活動やニーズ、「志」でつながろう。

ライブラリ



毎号「みやぎNPO情報ライブラリ」
登録団体の中から、ひとつをご紹介します。

特定非営利活動法人

今回は

防災士会みやぎ

<http://fields.canpan.info/organization/detail/1682781578>

理事長の高坂 一憲さんにお話を伺いました。

活動内容

2007年に日本防災会の宮城県支部として設立され、「自助」「共助」の原則のもと、宮城県内在住の防災士有志によって事業を展開しています。主には、防災・減災のための技能を磨くスキルアップ講習や、講演会・研修会の開催、自治体との連携事業等を実施しており、2012年4月にNPO法人化した後も、防災・減災のよりいっそうの啓蒙活動に力を注いでいます。



現在の活動での、注目ポイント

■防災・減災の啓蒙活動

県や市、以前開催した団体等、依頼があった自治体や団体に出向き、防災減災の方法をレクチャーしています。近々、学校から依頼を受け、生徒を対象に講演する予定です。そこでは、学校にいる際に、東日本大震災と同じ規模の災害に遭うことを想定し、どのように行動するかを具体的に考えてもらうワークを行い、その後普段生徒があまり意識していない、学校が建っている地形や標高、近隣に川があるなどの周辺環境情報を踏まえ、どこにどのように避難すべきかをお話しようと思います。対象者の生活に合わせた防災・減災方法を提案することを通して、防災を「自分事」としてとらえてもらいたいと思っています。

■みやぎNPO情報ライブラリとは

「NPO情報ライブラリ」は、NPO・市民活動団体の皆さんから活動に関する情報をお預かりして、地域の市民・企業など社会一般に広く公開・発信する情報発信支援事業です。



■防災士の人材育成「助けられる人より助ける人になる」

昨年は、宮城県防災指導員のフォローアップ研修を宮城県危機対策課より受託しました。そこでは、東日本大震災と宮城・岩手内陸地震の被害概要説明や、自主防災の事例や防災組織の支援活動の検証、避難所運営のワークショップを実施しました。

阪神大震災のデータによると、8000人の負傷者の約80%を助けたのは、家族や近所の方など、一般の方だったそうです。現在、宮城県内には約900名の防災士がいます。その多くが、東日本大震災の時には避難所運営等に参加するなど活躍したことが分かっています。このような背景もあり、一般の方が防災士となり、助けられる人から助ける人になれるように、今後も活動していきたいと思っています。

読者のみなさんへのメッセージ

昨年作成した、幼児・子供向けの防災・減災を分かりやすく解説した絵本「リオン」を沢山の子ども達に届けたいと思っており、その為の資金的援助を必要としています。皆様のご協力をお願い致します。

お問い合わせは

防災士会みやぎ
(事務局)

TEL: 080-1821-0335

次号の団体は

高坂さんよりご紹介

「SENDAI NPO子育て応援隊 ピンポンパン☆」

保育士・幼稚園教諭・レクリエーションインストラクター
でつくる子育て応援隊です。

(大町事務局 三浦圭一)

サポート・ご協力 ありがとうございます

■平成25年度会員(敬称略・順不同、2013年8月1日～9月30日)

(正会員)

長谷川公一、沼倉雅枝、木村正樹、渡辺一馬、渡辺兼光、鈴木正彦、平井俊之、渡辺博之、白川由利枝、高橋悦子、北尚登、大滝精一、茂木宏友、坂下康子、内海裕一、(特)麦の会、(特)杜の伝言板ゆるる、(特)MIYAGI子どもネットワーク、(特)グループゆう、(特)いわてNPO-NETサポート、(特)住民互助福祉団体ささえ愛山元、(特)蔵王のブナと水を守る会、東北HIVコミュニケーションズ、(特)みやぎ発達障害サポートネット、(特)いしのまきNPOセンター、(特)ソキウスせんだい

(準会員)

松尾敏行、須藤達也、上野裕子、鈴木素雄、愛知絢子、(特)都市デザインワークス、(特)白石うぐいす会、中村祥子、山口宏、滝澤陽子、(有)平野印刷所、朝田恵美、和田京子、(福)仙台的のちの電話、前川典子、藤田佐和子、(特)塩釜市体育協会、(社)日本損害保険協会、渡辺雅昭、鈴木典男、(特)ふくしまNPOネットワークセンター

■企業・団体協力(50音順、敬称略)

(株)オーカム(事務所スペースを社会貢献価格にて)、富士ゼロックス宮城(株)(カラーコピー機を社会貢献価格にて)

ご寄附ありがとうございます

■東日本大震災救済・復興支援活動のための寄付総額(2013年9月末)

プロペラ募金へのご寄付(当センターが行う復興支援活動を応援する寄付)……………238件 24,208,556円

■はばたけファンドへの寄付総額(宮城県内NPOが行う救援・復興支援活動を応援する寄付)……………48件 10,603,180円

せんだいCARESクロージングシンポジウム

10年間の軌跡を振り返るとともに、これからのまちづくりの展望を考えます。

■プログラム

1. せんだいCARESの今までの軌跡について

2. 講演 「地元の人が地元を支える仕組みとは」特定非営利活動法人吉備野工房ちみち 理事長 加藤 せい子さん

3. パネルディスカッション これからのまちづくりの展望

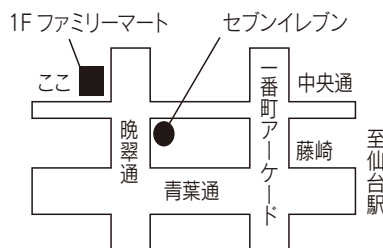
■日時:12月4日(水)18時30分～21時 ■会場:仙台市市民活動サポートセンター地下1階 シアターホール

連絡先

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎ NPO センター
〒980-0804 仙台市青葉区大町 2-6-27 岡元ビル 7F
TEL: 022-264-1281 FAX: 022-264-1209
E-mail: minmin@minmin.org HP: http://www.minmin.org/

発行:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事 大滝精一
紅邑晶子
編集部: 伊藤浩子 高尾詩乃
発行日: 2013年11月1日
デザイン: 氏家朗



岡元ビル 7F 仙台駅から徒歩 20～25 分

編 | 集 | 後 | 記 |

朝晩のひんやりとした空気や、街を歩くと金木犀が香る日々、思わず大きく深呼吸をしたくなる。こんなことから季節が秋になったことを実感するのである。

様々なイベントが行われるこの時期、季節感とともに仙台のイベントを味わおう。

(伊藤浩子)

今年4月に、せんだいメディアテーク館長に哲学者の鷺田清一さんが就任して以来、仙台市内のいくつかの書店では「鷺田清一コーナー」が設けられています。紅葉が深まるこの時期、『じぶん・この不思議な存在』鷺田清一著 講談社現代新書を読み始めました。本文には、「人生といえはすぐ、まっすぐな線のように思い浮かべるくせから離れる必要がある。」とあります。自分はこうあるべき、と決めすぎず、殻を破りながら日々活動に取り組みたいと思います。読書そして行動の秋です。

(高尾詩乃)